

影と倫理（一）

純粹倫理と記憶の観点から見た「影」

高橋徹（倫理研究所専門研究員）

罪は、恵みにあひてあらはれる。

悪は、善につままれて解ける。

邪は、愛にひたされて改まる。

（丸山敏雄⁽¹⁾）

はじめに

筆者は、前号の『倫理研究所紀要』（第十八号、二〇〇九年）に「影と倫理」への序章と題した論を展開し、倫理全般（人のより良い生き方）との関係における「影」を浮き彫りにしようとした。また、「影」の働きにも言及した。前稿における「影」は、倫理研究所の創始者であり、「純粹倫理」（「新しい倫理」、「実験倫理」とも呼ばれる）を唱道した丸山敏雄（一八九二～一九五一、以下「敏雄」と略す）が著作の中でしばしば述べる「陰影」「暗影」にも似ていることが確かめられた。

本稿では、この「陰影」や「暗影」に関する事柄を第一に掘り下げ、さらに「記憶と影はどのような関係にあるのか」を考えていきたい。